飯島賢二の『恐縮ですが･･･一言コラム』

第 109 回　甲子園をどう見るか？～聖人たちの体臭はたまらない！

今年も夏の甲子園、全国高校野球大会が始まった。もはや、日本の国民的行事の一つとして、多くのファンが待ち望んでいると言っても過言でない。ところが今年の甲子園は、少しばかりいつもと違っていた。

詳細は連日ニュースで報道されているから、あえて言わないが、四国の「明徳義塾」高校が、部員の不祥事が発覚したとの理由で、大会開始直前で出場辞退、変わりに「高知高校」が参加するとのこと、長い甲子園の歴史の中、初めての惨事である。

このニュースを聞いて、何で今頃、学校の責任は、高野連のやるべきべきことは、不戦勝にはならないの…同情論、批判論、国民的行事ゆえの、それこそ色々な思いであろう。が、本当はどうでもいい話なのかもしれない。とは言え、どうも腹の虫がおさまらず、あえて批判を覚悟で、そんな話をちょいと述べてみたくなった。

最初に謝っておくが、実は小生、高校野球、特に甲子園はあまり好きではない。その理由は、見事に、小生の「個人的偏見」にある。一つは、家で毎日とっているが、主催する「朝日新聞」が一番嫌いな新聞社であること。これは正に、理由にならない。

もう一つは言ってみれば「屁理屈」である。教育の一環という理念の下に実施される甲子園大会が、身勝手な「大人達」の飯のタネにされ、それこそ純粋だったに違いない「子供達」を商売のツールとし、多くの悲劇を創出している。その事実を直視しようとせず、いかにも偽善的に「聖人面」している、お偉い野球関係者、それは高野連かもしれないし、プロ野球機構かも、あるいは日体協かもしれない。彼らがその責任を微塵も感じないあの体質（いや、耐えられないまでの体臭と言ってもいい）が、単に嫌で仕方がない。

プロ野球選手を夢見て幼い時からバットを握り、必死に練習に燃え、輝いていた少年の瞳は、その素質が開花すればするほど、曇りがちになってくる。徐々に世間から注目され、有名中学や野球専門高校、スポーツしか売り物がない大学のスカウトが日参する。破格の契約金、保証金を提示された親も、つい判断を迷ってしまう。無教養なスポーツマスコミが追っかけだし、かわいい女の子がちらほら集まってくる。学生に交際費やタクシー代まで払っていた事実がばれたのは、ついこの間のことのはず。こんなことをされたら、誰だって勘違いをしてしまう。東大入学以上に難関なハードルを乗り越え、やっとプロになったはずが、今までの、常識とはかけ離れた環境に慣れきったしまった彼らは、実力本意の本来的スポーツの世界で、もはや開花すべき素質はなくなってしまっている。

野球に限らない。スポーツの勝つには技術的スキルだけではなく、「頭脳」が必要。専門バカにもはや「栄光」はとれないのが、現代のスポーツだと信じている。松井やイチロー、中田たちが日本を離れていく理由、彼らは小生と同じ「体臭がイヤ」なのかもしれない。